

口腔領域の画像診断 ——歯根尖レベルのX線CT水平断——

丸山 清, 長内 剛, 筒井 稔

松本歯科大学 歯科放射線学講座 (主任 丸山 清 教授)

X線CTを用いた歯科領域の scan level は、頭蓋の発育や形態を知るためには眼耳平面を、歯牙・歯周組織病変の診断には咬合平面を基準面とするのが適当と思われる。

ここに示すCT像は、図1のデジタルX線像(スキャノグラム、スカウト画像などと呼ばれる)にみられる如く、上顎に関しては眼耳平面に平行で上顎歯根部を通る slice A (図2 a のCT像)及びそれより8 mm 歯冠寄りでAに平行な slice A' (図3)で scan されている。下顎に関しては下顎下縁に平行(Aに対して15°前下方へ振ってある)で根尖を通る slice B (図4 a のCT像)が示されている。尚 slice 厚は何れも2 mm である。

3画像とも、根の断面形態・分岐はもとより、歯髓腔と一部ではエナメル象牙質境界まで描出されているが、根管には根充剤やポストクラウンによると思われるアーチファクトがみられる。

図2において前歯部では21|12の歯牙がみられ

ず、切歯管が分岐部近くでハート型を呈しているのがみられる。

6|6部では歯牙も骨質もみられず恰も抜歯窩の如き所見を呈するが、slice A' (図3)をみると6|6の根尖が明瞭に描出されているので、Aにおける同部所見は上顎洞底部であると診断出来る。

またA'では21|12の歯根断面と8|8の咬頭が描出されているので、これらを考え併せ、上顎全歯牙の根尖部を観察するには、断面を今少し前下方へ傾斜させる必要があると考えられる。

slice Bは下顎下縁とほぼ平行で、図4には顎舌骨筋神経溝や下顎隆起がみられるが、21|12の根尖は描出されておらず、全歯根の断面を観察するには scan level を前上方へ傾ける必要がある。

歯根・歯槽部の水平断を scan したCT像は、下顎下縁と平行にとったもののほか殆ど報告がないが、デジタルX線像に適確な cut-line を引くことにより、必要なCT像を得ることが可能となる。

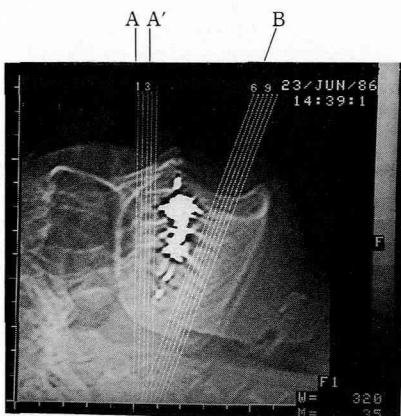


図1 : scanlevel を示すデジタル X 線像

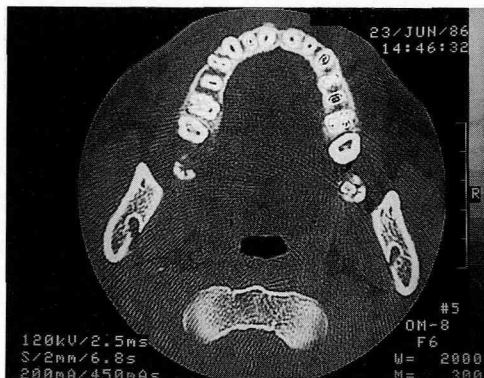


図3 : slice A' の CT 像

文 献

1) Takahashi, S. (1969) An Atlas of Axial Tomography and its Clinical Application, 40-50. Springer Verlag, Berlin.

2) 平敷淳子, 亀井民雄 (1985) 頭頸部CT診断アトラス, 55-64. 朝倉書店, 東京.

3) Rohen, J. W., 横地千仞共著 (1986) Color Atlas of Anatomy, 116-120, 医学書院, 東京.

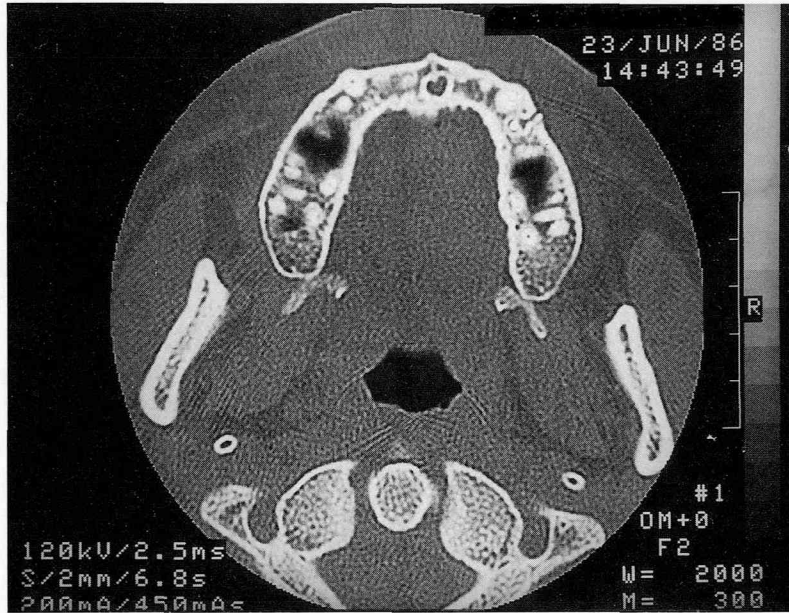


図2 : slice A のCT像

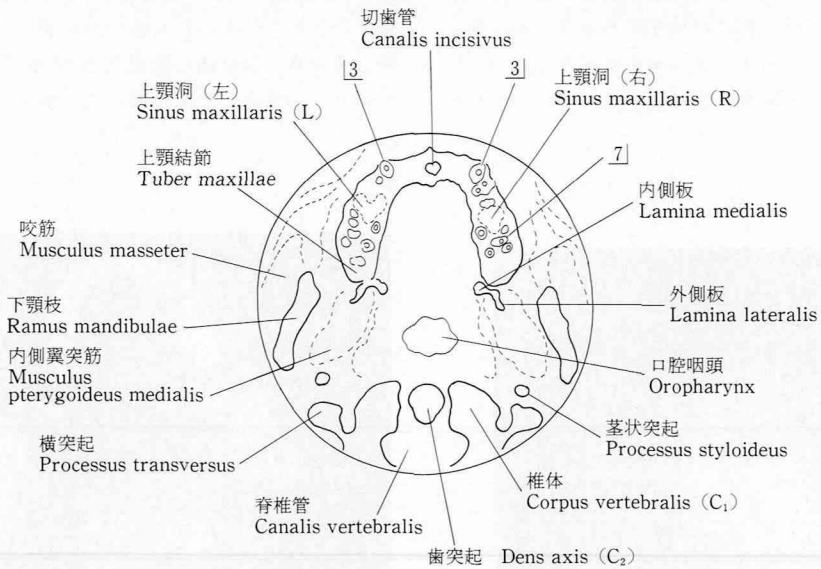


図2, b : slice A のトレース像

4) Ferner, H. 編: 小川哲三, 石川浩一訳 (1971) 臨床応用局所解剖図譜, 第三版, 221-225, 医学書院, 東京.

5) 田口 修, 神田重信, 白土雄司, 平河孝徳(1986) 2 胞性を示した Stafne's Bone Cavity の CT 所見. 歯科放射線, 26: 62-63.

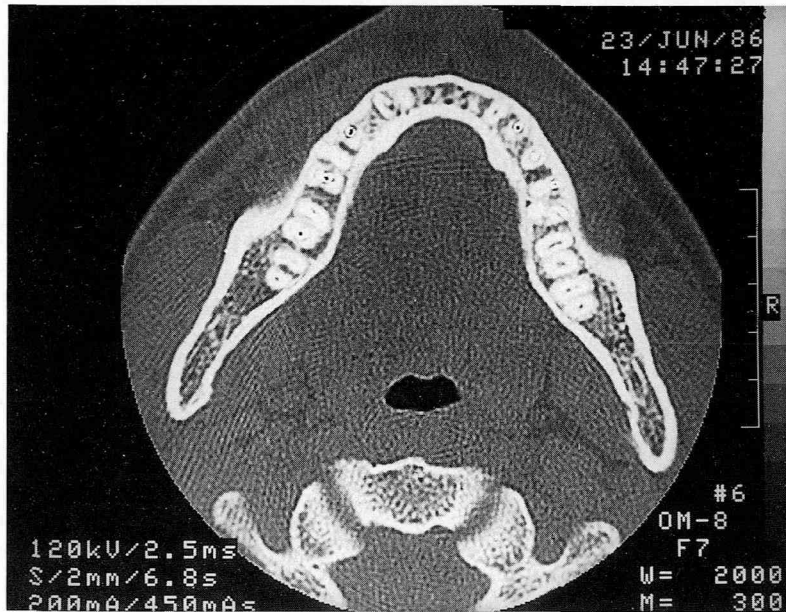


図4, a: slice B の CT 像

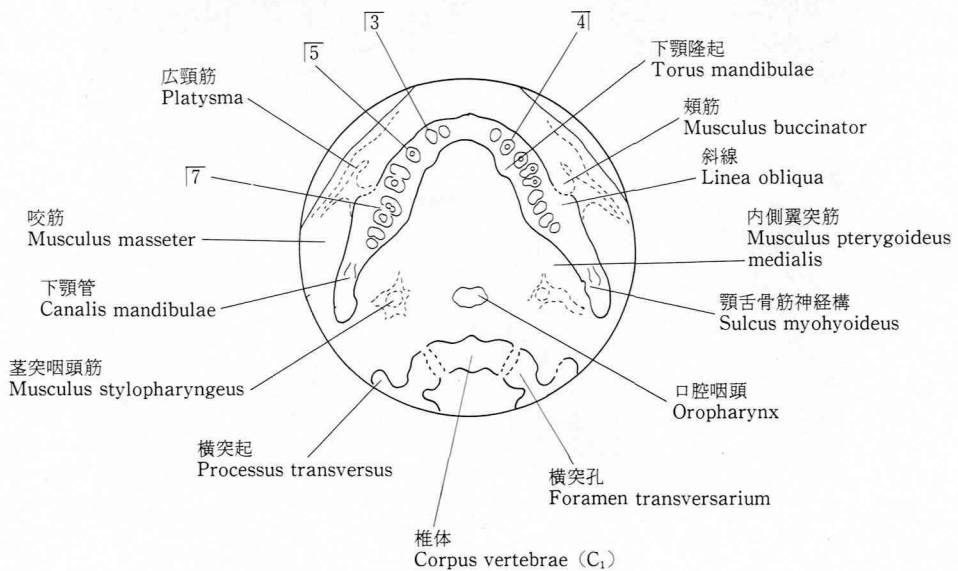


図4, b: slice B のトレース像